

岩倉洋一郎、米原伸、藤沢順一、浅野雅秀、川出才紀編『生命とは何かを問い続けて：  
分子生物学の先へ』（京都大学学術出版会、2020）pp. 255-260

## 『生物記号論』、あるいは「科学の形而上学化」と「意識の第三層」

サイファイ研究所 ISHE 代表&フランソワ・ラブレール大学客員研究員

矢倉英隆

わたしは東京都の研究所を退職した 2007 年、それまで携わっていた科学という営みと人間存在について思索するため、パリ大学大学院（哲学専攻）に向かった。それからほどなくして、研究所で一緒にいた岩崎辰夫先生（京都大学ウイルス研出身）からお便りが届いた。その中にはその前年に出たばかりの『生物記号論』（1）が同封されていた。何かの集まりで少し変わった人間がいることが話題になったようで、著者の先生がわたしにも読んでほしいとのことだった。早速手に取ってみたが、長い間の科学での生活で凝り固まったわたしの頭にはそこに書かれてあることを受け入れるだけの余裕はなかった。その時は定年後の歩みが書かれた「おわりに」を読んだだけで、暫くの間本棚の奥に眠ることになった。その間、気にはなっていたが新しい領域の情報量に圧倒され、手に取ることはならなかった。それから 3 年後のある日、論文を漁っている時にどこかで見た名前が現れたのである。記憶を辿ってみると、『生物記号論』の「おわりに」に出ていた名前であることが判明。マスターでの追われるような時間が終わっていたこともあり、再び挑戦することにした。この間、哲学の領域における教育が硬直化していたわたしの脳を少しは解きほぐしたのか、最初の時よりは興味を持って読むことができるようになっていた。その時の感想を拙ブログ「科学・医学・哲学を巡って」に掲載し、3 年越しにお約束を果たすことができた（2）。これが先生との最初の接触で、それから亡くなられるまでの 5 年ほどの間に交わされた十数回のメールを通してのお付き合いであった。

上のブログ記事では、先生の基本的なお考えを自分なりに次のようにまとめた。生物現象は還元主義や物質主義だけでは理解することができないという信念が見て取れること、現在の科学に批判的な見方をしているためか「意味」が強調されていること、さらに生氣論やアニミズムなどを排除すべきものだとは考えていないことなどである。これらの点は当初の拒否反応を引き起こした原因にもなっていたが、3年という時間がそのような見方に対する寛容を養ってくれていたようである。その上で、記号論が生物学に取って代わることはないが、生物学における知見を解釈し直す一つ的手段になり得ること、そしてこの二つの領域は相互の接触を進めるべきだという見方を提示した。

その直後、先生から返信が届いた。そこには、すでに86歳を迎えてこれからどれだけ仕事ができるのか分からないこと、記号論を理解してくれる人が予想以上に少ないこと、そして自然科学についての考えも綴られていた。記号論に向かうことになった問題意識がそこにあると思われるので簡単に要約してみたい。自然科学を人類の傑作と認めた上で、これまでの基準となってきた観察者に依存しない客観性や唯物主義に拘る限り、生物学は機械論すなわち死物の学に留まるのではないか、さらに意味や意図や価値に関わる言葉が多用されている現状を考える時、自然科学はそうとは認めていないものすでにその性格や基準が変容してきているのではないかとの疑問を出されていた。さらに、科学は没価値を謳っているが、実際にはグローバルな資本主義に寄与し、格差（南北、貧富など）の拡大に手を貸していて、先進国の政治経済制度を支える主要部分になっているとの厳しい指摘もあった。そして最後に、翌年にニューヨークで開かれる生物意味論会議（International Gathering in Biosemiotics）に参加して会の様子を知らせてほしい旨の言葉とともに発表されたばかりの論文（3）が添えられていた。

2011年、懐かしの界限にあるロックフェラー大学で開かれた第11回の会議に出席し、「免疫細胞シグナリングにおける情報」について発表した（4）。その会議で、この領域をリードしている研究者が自らの領域に持っている問題意識を初めて聞くことになった。まず、始まって数十年になる生物意味論が未だ広く認知されているとは言い難い現状のまま、この営みを続ける価値はあるのかという疑問が出された。その上で、質の科学に留まるのか、量の科学に移行すべきではないのか、その場合の方法論はどうす

るのかという問題提起がされた。それは科学で見つかった事実を解釈し直すというやり方だけでよいのかという問い掛けでもあった。また、目的、意図、意味などの科学における禁句をどのように扱うのかについても問題にされていた。現在の哲学が科学の影響を受け、科学的であろうとしているように、生物意味論の世界も科学としての正統性を獲得しようとしているように見えたのは驚きであった。このような現状を先生にお伝えしたところ、無理に科学にするのではなく解釈の学、あるいは哲学の一分野として深めた方がよいのではないかとの返答が届いた。わたしも現在の哲学の流れには違和感を持っているので、そのお考えに抵抗を感じることはなかった。そのメールには「アニミズムはいいですね!」というような言葉があったり、分子が「認識」し、情報を「伝達」すると考えることは、生物学者自体が分子に主体性のようなものを認めたいという気持ちの表れではないかというような推測があったりした。生物と無生物との間に明瞭な境界があるわけではなく、ヒトと同じものとは言えないまでも心的な要素がすべての生物、さらには無生物にも存在するという先生のお考えは 2009 年と 2013 年の論文の中で広範に展開されている (3, 5)。

最近、わたしはわれわれの意識を三層構造で捉えてはどうかと考えるようになってきた (6)。一番表層にある第一層は日常的な状況で働く意識で、かなりの部分はオートマティックな思考をする領域である。第二層は専門領域の中で働く意識で、われわれの場合は科学であるが、普通は第一層と隔絶している。そして、さらに深層にはわたしが重要だと考える第三層がある。これは上記二つから離れた時に認識できる領域で、ここでは境界や隔壁のない自由な思考が羽ばたき、普段目に触れないところにも視線が向かうことがある。この領域に入るためには日常生活や職業生活から解放された静かな時間が必須になる。わたしの場合、偶然にも 9 年に及ぶフランスで無為の生活の中に在ったため、このことに気づくことができた。「無為の有為」とでも言えばよいのだろうか。振り返れば、科学の世界にいる時には意識は第二層までに留まり、第三層の存在にも気づいていなかったことが見えてくる。この層の開拓は哲学にとっても重要で、それは『生物意味論』の世界にも当て嵌まるだろう。科学の影響を強く受け、意識の第二層に留まる限り、このような領域に興味湧かないのはごく自然なことなのかもしれない。

このような状況を考慮に入れ、現在定義されている科学を新たな視点から定義し直した方がよいのではないかと考えるようになってきた。「科学の形而上学化」という試みの提唱である(7)。これはオーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) の三段階理論に靈感を得たものである。この理論では、人間精神は神学的段階、形而上学的段階を乗り越えて、最後に最高の科学的段階に到達するとされている。しかし、前二段階を捨て去ることはわれわれの思考から豊かさを奪うのではないかと考えたことから生まれたものである。この試みでは、現在の科学を取り巻く哲学や歴史を含めた他の領域も科学と同じ土俵に上って科学の問題について研究、議論することを提唱している。その上で、その全体を新たな科学として再定義しようとするものである。この立場を採れば、形而上学化されていない科学は不完全な科学ということになる。さらに、この試みは科学者に意識の第三層の開拓を必然的に要求するものである。このような認識が現在の科学者にも及ぶことになれば、哲学はもちろん生物意味論の世界も新しい科学の中に入ることになるためにごく普通に意識に上り、時には議論に参加することにもなるだろう。30年ほど前、免疫学と意味論の融合が試みられたことがあるが、失敗に終わった(8)。その理由は、意味論の方は免疫学から得るものはあったが、免疫学者は相手を必要としていなかったからである。哲学や意味論は科学者には必要のないものとして無視されたのである。このような片思いの状態は科学と哲学の間で普通に見られるものだが、それを改めるためにも「科学の形而上学化」と「意識の第三層」を意識することには大きな意味があると考えている。

物活論、生氣論、さらにアニミズムのような考え方は人間精神の古層にあると言うこともできるだろう。これまで科学の中で否定されてきたものだが、先生はそういう見方を採っているとされても異論はないと言っておられた。20世紀フランスの哲学者ジュールジュ・カンギレム (George Canguilhem, 1904-1995) は、「自然に対して親への感情や同情の感情を抱く学者は・・・ごく自然に生命と魂と意味をそこに見出す。このような人は基本的に生氣論者である」とした上で、生氣論は論駁されても論駁されても蘇るバイタリティを持った考え方であると指摘している。それはわれわれの心の奥に潜んではいるが、科学的で理性的な思考によって覆い隠されているものに過ぎないからではな

いだろうか。科学が圧倒的な力を持つ現代、ナイーブなサイエンティフィック・コレクトネスとでも言うべきものを錦の御旗にした批判が来たとしても先生は受けて立つと言っているように見えるのはわたしだけだろうか。

## 参考文献

1. 川出由己. 生物記号論：主体性の生物学. 京都大学学術出版会 (2006)
2. 矢倉英隆. 川出由己著『生物記号論：主体性の生物学』を読む.  
<http://georges-canguilhem.blogspot.fr/2010/12/blog-post.html>. (2010.12.1)
3. Kawade, Y. On the nature of the subjectivity of living things. *Biosemiotics* 2: 205-220, 2009.
4. 矢倉英隆. 久し振りのマンハッタンで生物意味論の世界を覗き、科学と哲学の関係を再考する. *医学のあゆみ* 249: 565-569, 2014.
5. Kawade, Y. The origin of mind: The mind-matter continuity thesis. *Biosemiotics* 6: 367-378, 2013.
6. 矢倉英隆. 「意識の第三層」、あるいはパスカルの「気晴らし」. *医学のあゆみ* 258: 185-189, 2016.
7. 矢倉英隆. 文化としての科学、あるいは「科学の形而上学化」の実践. *医学のあゆみ* 260: 187-191, 2017.
8. Sercarz, EE, Celada, F, Mitchison, N, Tada, T. (eds) *The Semiotics of Cellular Communication in the Immune System*. Springer-Verlag, 1988.